

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32511

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2022

課題番号：15K17281

研究課題名（和文）教育現場における性同一性障害／性別違和の児童・生徒への支援の方法に関する研究

研究課題名（英文）Research on Methods of Support for Children and Students with Gender Identity Disorder/Gender Dysphoria in Educational Settings

研究代表者

庄島 幸子 (SHOJIMA, Sachiko)

帝京平成大学・健康メディカル学部・准教授

研究者番号：70572676

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、小学校・中学校・高等学校における性同一性障害者／性別違和の児童・生徒（当事者）への支援の方法について、当事者-教員の間、当事者-保護者-教員の間、当事者-他生徒の間の3つのコミュニケーションの側面から検討を行った。結果、学校には「個別対応-集団対応」、「現在（配慮）-未来（制限：受験等）」、「子どもの成熟-未熟」、「選択肢の限定-拡張」など相対立する軸が存在し、これによって教員の対応や意識にばらつきが生じている可能性が示唆されたが、生徒-教員-保護者が「共同体になっていくための未来に向けた語りを持っている」ことがコミュニケーションの下支えになることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

思春期・青年期の性同一性障害／性別違和の児童生徒は、関係性の中で孤立しやすい。所属感の減弱は自殺の素因であり、早急な介入が必要である。しかし、学校現場では対応に苦慮するケースが目立つ。本研究は学校における当事者を取り巻く関係性を洞察し、学校の機能と役割を明確にすることで、彼らを孤立から救うためのコミュニケーションについて明らかにするという点で意義がある。また本研究は一種の介入を伴い、研究に関わる当事者・教員・他生徒に介入の効果が見込まれる。特に、教員は、現場に対して長期的な波及効果を及ぼすと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study examined methods of support for students with gender identity disorder/gender dysphoria (parties) in elementary, junior high, and senior high schools from three aspects: (1) between the parties - teachers, (2) between the parties - parents - teachers, and (3) between the parties - (2) between the parties concerned and teachers, (3) between the parties concerned and parents and teachers, and (4) between the parties concerned and other students. The results showed that schools have conflicting axes such as "individual response - group response," "present (consideration) - future (limitation: examinations, etc.)," "child maturity - immaturity," and "limitation of options - expansion of options," which may lead to variations in teachers' responses and awareness. However, it was clear that communication is supported by the fact that students, teachers, and parents "have a narrative for the future to become a community."

研究分野：心理学

キーワード：性別違和 学校 コミュニケーション

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 教育現場における性同一性障害/性別違和の児童・生徒の状況

近年、性同一性障害 (gender identity disorder, GID) の社会的認知が進み、GID を主訴として受診する者は増加傾向、また若年化傾向にある (針間, 2014)。教育現場においても性別違和を抱える生徒は稀ではない。学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査 (文部科学省, 2014) では、GID もしくは性別違和 (gender dysphoria, GD) とみられる児童・生徒は全国の小中高校で少なくとも 606 人に上っている。

(2) 思春期・青年期における性同一性障害/性別違和者のメンタルヘルス

GD/GID の人々には自殺傾向やうつ傾向、自殺未遂、絶望感、薬物使用、摂食障害といった自殺関連行動が高率で生じる。ハラスメントや、いじめも深刻であり、彼らにとって学校は身体的・言語的ないじめを経験する最初の場合であるとされる。さらに、人格の基礎となる性同一性の揺らぎは当事者を苦しめるだけでなく、学校や家族との間で軋轢を多発させ、当事者の孤立感を深める。我が国の調査では、GID 者が思春期に抱える問題行動として、不登校 (29.2%)、自殺念慮 (74.8%)、自殺未遂・自傷行為 (31.0%) が高率で生じることや、親しい友人が少なく、ポジティブなイベントが少ないことが報告されている (中塚・江見, 2004)。このことから、思春期以降の GID/GD を抱える児童・生徒にとって学校はもっとも危険な社会的文脈の一つである。

(3) 教育現場における性同一性障害/性別違和の児童・生徒に対する支援の必要性

我が国においては、GID/GD の児童・生徒への支援の方法は確立していない。文科省 (2016) は、性に関する学校教育では児童・生徒の発達段階をふまえ、学校、保護者での共通理解、集団指導と個別指導の区別が必要としたうえで、「教育の中立性の確保に十分な注意を払い、指導の目的や内容、取り扱いの方法等を適切なものとしていくことが必要」だとしている。一方で多くの学校現場にとって、取り組むうえでは「かなり迷う場面が多い」ものであり、手をつけられないままの学校も多い (郡, 2022)。教育現場における GID/GD の児童・生徒への支援方法の確立が求められる。本研究では、当事者 - 教員間の二者関係、当事者 - 保護者 - 教員間の三者関係、当事者 - 他生徒間の集団関係の 3 つの関係性に着目する。それぞれの関係性において孤立を生まないサポートイブな関係性を築くためのコミュニケーション・モデルを構築する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、小学校・中学校・高等学校における性同一性障害者/性別違和の児童・生徒 (当事者) への支援の方法について、当事者 - 教員の間、当事者 - 保護者 - 教員の間、当事者 - 他生徒の間の 3 つのコミュニケーションの側面から検討を行い、現場で有用な支援モデルの構築を試みることである。GID/GD の児童・生徒らが孤立感や絶望感を抱えることなく、安心して学校生活を送り、ひいては適切な自己形成が促されることが本研究の大きな目的である。

3. 研究の方法

本研究では、当事者 - 教員の間、当事者 - 保護者 - 教員の間、当事者 - 他生徒の間の 3 つのコミュニケーションの側面から検討を行い、下記の 5 つの調査を実施した。調査は、帝京平成大学倫理委員会の承認を得て実施された。また、これらの調査のほか、自治体や教育委員会、子ども家庭相談センターの職員へのヒアリング、中学校における「性の多様性」に関する授業見学や教員とのディスカッションなど様々なフィールドワークを行った。

(1) 調査 1: 質問紙調査 (公立中学校副校長対象)

研究協力者は、都内 C 区の公立中学校の副校長 24 名である。研究者が依頼を受けた、性の多様性を学ぶ研修会 (2022 年 1 月) の事前アンケートとして回答を得た。アンケートは、紙媒体での調査のほか、一部電子メールを通じて配布された。アンケートの質問項目は、性の多様性や LGBT の教育の必要性、教育が可能な年齢、性の多様性に関する知識、性的マイノリティの生徒とのかかわりや支援の経験、性的マイノリティの生徒や教職員への支援・配慮に関する悩みや考え (自由記述) であった。数値的データは集計し、自由記述の語りは質的に分析を行った。

(2) 調査 2: インタビュー調査 (公立中学校副校長対象)

研究協力者は、都内 C 区の公立中学校の副校長 3 名である。研修会の事後アンケートを通じリクルートを行った。これまでの教員経験のなかで、性的マイノリティ生徒への対応に関してうまくいった・うまくいかなかった経験やその背景、集団指導の場における性の多様性教育のありかたについて、1 時間~1 時間半の半構造化インタビューを行った。研究期間は 2022 年 1 月~3 月であった。インタビューは録音し、トランスクリプトを作成した。事例ごとに分析を行った。

(3) 調査 3: インタビュー調査 (セクシュアルマイノリティ当事者を含む大学生対象)

2019年～2022年にかけて大学生23名(年齢18歳～22歳)を対象とした半構造化インタビューを実施した。セクシュアリティの多様性について講義を行ったあと、理解度についてアンケートを行い、協力者を募集した。全ての協力者は自発的にインタビューに参加した。参加した全ての協力者は事前の質問紙調査において、「多様な性のあり方に対して、寛容な態度をもつ」態度をもつ学生であった。協力者のなかには、自身をセクシュアルマイノリティと自覚する者もいた。インタビュー時間は1時間～1時間半程度であった。性的マイノリティという概念や存在を知るきっかけや経緯、性の多様性に関する教育を受けた経験、性的マイノリティに対するイメージなどについて聞き取りを行った。インタビューは録音し、トランスクリプトを作成した。これまでセクシュアリティをめぐるどのような知識・情報をどのように入手し、どのように解釈され、どのように概念化されるのか、という観点から分析を行った。

(4) 調査4：インタビュー調査(性別違和/性同一性障害の当事者対象)

GD/GIDやトランスジェンダー4名に対して、1回～5回にわたり、1時間～1時間半程度の半構造化インタビューを行った。研究協力者とは大学や自助グループを通じて関係性を築いた。なお、一部のインタビューは、本研究の開始以前に実施しており、本研究の目的に合わせて再分析を行った。インタビューは録音し、トランスクリプトを作成した。分析では、それぞれの事例ごとに性的自己の変容プロセスを描出した。

(5) 調査5：当事者-非当事者間の対話実践(多様なセクシュアリティをもつ大学生らを対象)

2022年10月～3月にかけて1冊の本を15回かけて輪読する自主ゼミの形式で、多様なセクシュアリティをもつ大学生同士(男性2名、女性5名)の対話実践を行った。この対話実践は、対話的フォーカスグループとよばれ、研究者との1対1のインタビューでは語られない可能性のある、よりリアルなコミュニケーションや思考、感情、経験に迫る手法として本研究において開発、試行された手法である。研究者は教員としてその場のファシリテーターとして積極的に関与した。学生たちは、レジюмеを作成したうえで章の内容を発表し、議論するための問いかけを考えた。議論終了後、報告担当者は議論を振り返り、章の内容の振り返りを行い、共有した。議論中の対話は全て録音の許可を得たうえでICレコーダーに録音した。トランスクリプトを作成し、分析を行った。

4. 研究成果

(1) 学校における性別違和/性同一性障害の児童生徒の経験

調査3および調査4からは、学校におけるGD/GIDの児童生徒の経験が浮き彫りになった。当事者の語りをもとに、性同一性(ジェンダーアイデンティティ)変容の背景(文脈)に何があるのか探索的な分析を行ったところ、自身の性別を引き受けるという点において学校という場が重要な意味をもつことが明らかになった。学校(教員や他生徒、制服や校則などのルール)と自分の関係性について語る際、「なじむ/なじまない」「追いつく」「補う」という動詞が4人の語りに散見された。「なじむ(なじまない)」という動詞は自己を定位する場所との一体感があるかどうかという意味を持っており、性同一性というアイデンティティは身体そのものを含めた場所(ポトス)との関連で捉える必要があることが示唆された。語りには、場所を指すメタファーが多用されており(出生時の性別で生きていた世界を「僻地」「文明がないところ」「入院」と語っている)なじむ場所がないことは、自己存在の不在を意味し、苦痛をもたらしている。「追いつく」という動詞からは、学校で明示化される性別二元的世界になじむための工夫や努力をしていることが明らかになった。ある性別をもって、その世界に自己を定位していくためには、速さ、すなわち加速度が必要であることが示唆される。逆に彼らの視点からみると、思春期の男女は「どんどん一生懸命分かれていく、激しくなっていく」川の流れるようであり、そのなかで「自分だけとどまって小学生のまんまの感覚」を持っており、追いつけない世界として体験されていた。「重ねる」という動詞は、揺らぐ性的自己を定位するために、文化的なシンボリックソース(Zittoun, 2007)を意味している。彼らにとってのシンボリックソースとは、妄想のキャラクターであったり、自分が書いている創作の小説の登場人物であったり、動物であったりする。複数のリソースに自己を重ね合わせながら、多重の世界を生きる者もいれば、リソースを手掛かりにししながら自身の生きていく道筋を見出す者もいた。シンボリックリソースに依拠することで、「なじまない」「追いつけない」日常の過酷な状況で生をつなぎ、さらに性的自己への新たな意味づけが生成されているのである。このことから、性別を引き受ける過程において、多様なシンボリックリソースを持つことの重要性が示唆された。

これらの結果をまとめると、彼らは大多数のシスジェンダーとの違いを発達の時間の流れのなかで「追いつけない」として感じており、結果として学校という場、集団に「なじめない」経験をしていた。複数の多様なシンボリックソースの存在が、彼らの生き様を支える可能性が見出された。

(2) 多様な性を生きる子供への対応の経験と意識

学校教員側の認識の軸

中学校で対応が必要になるケースの多くは、性的マイノリティのなかでも社会的もしくは身体的に性別移行を望む生徒であった。GD/GIDの児童生徒への対応はトイレや着替え、授業を欠

席した場合の成績評価などの個別対応だけでなく、制服のスクラックス導入や多様性の視点を盛り込んだ専門教科指導（例：保健体育）、生徒会を中心とした校則の見直し（例：髪型、制服）など集団対応を伴っていた。対応においては「物（制服）だけあってもダメだなんていうところもあるし、きっとそれは『履いてもいいよ』っていう雰囲気もあるし、生徒にとっても見栄えが悪くないっていうことも必要」と語られたように、当該生徒とそれ以外の生徒を分け隔てないものである必要があり、全ての生徒にとって快適な（「人の迷惑にならなければ OK」）学校のルールや雰囲気が醸し出されることを重要視していた。一方で、制服や髪型については「選択肢があることで着こなしの仕方が乱れる」可能性や高校入試への影響、「悪気なく残り続けている習慣（例：男女別名簿）」、教員特有の一步先を見越した心配や不安（「自分の対応によって逆に傷つけたらどうしよう」）があることが明らかになった。

また、性の多様性・LGBTの教育の必要性については、24名中「あまり必要とは思わない」と回答した1名を除き、全員が「必要」と考えていた。教育の開始年齢については、「小学校入学前」が0名、「小学校低学年（1-3年）」が7名、「小学校高学年（4-6年）」が8名、「中学」が7名、「高校」が1名、「大学」が1名であり、ばらつきがみられる。小学校高学年以上が開始年齢として適しているという理由では、第二次性徴といった身体的な成熟と精神的な成熟（性に関するメタ認知、他者への思いやり、性別を意識し始める年齢）を待つという意見（小学校高学年以上）がみられた一方で、小学校低学年では、好奇の対象にする前、悩み始める前、集団生活のなかで多様性を尊重できるベースを身に付けさせるという意見がみられた。また、懸念事項として「生徒の関心の差が大きい」「内容が浸透せずいじめの対象になる」「性に関する話を全体でしてほしくない」と考えるマイノリティ者がいるのでは」という意見がみられた。

これらのことから、学校現場において多様な性を生きる子供への対応や教育を考えると、「個別対応 - 集団対応」、「現在（配慮） - 未来（制限：高校入試）」、「成熟 - 未熟」、「選択肢の限定 - 選択肢の拡張」など相対立する軸が存在し、これによって教員の対応や意識にばらつきが生じている可能性が示唆された。

親の受け止め方

親は、わが子が性的マイノリティであることをどのように受け止めるのか。親の子供に対する否定的捉え方には、＜普通じゃない＞＜異質、変＞＜偏見をもってみてしまう＞がある（Shojima, 2019）。これらの捉え方の背景には、同性を好きになる気持ち（同性愛の子供の親）や、出生時に割り当てられた性別のまま生きていけないことに対する＜根本的な分かなさ＞が存在していた。否定的感情には、親として子にしてやれることがないという＜無力感＞、親が描いていた子供（さらに今はまだ存在しない孫）との未来への＜あきらめ＞、また親として何も知らなかったことに対する＜自責の念＞があった。Shojima（2019）によれば、夫婦1組をのぞき、全ての親が「受け入れるしかない」という受け身的な受容をしていた。一方で親には、何もできなかったことに対して今から子供をサポートできることを模索する＜報いる＞行動が生まれていた。本研究と照らし合わせると、子供のことを1番に考え、現時点からなんとか報いようとする行動ゆえに、学校との間に乖離が生まれる場合が想定される。親と子供が一体になって、学校に不平不満をぶつけるようなケースでは、親の子に対する受け止め方が背景にあると思われる。親もまた今現在の子供になんとか関わろうとするなかで、学校と衝突してしまう可能性があると思われた。

（3）子供たちは多様な性をどう理解するか

大学生を対象にした調査3から、セクシュアリティをめぐる概念形成に関する発達のプロセスを明らかにした。調査3の結果は、当事者を取り巻く他児童生徒とのコミュニケーションのあり方に示唆を与えると考えられる。小学校低学年から中学年では、子供たちは性にまつわる周辺的情報に受動的に触れる経験をしていた。例えば、バラエティやドラマに出るタレントやアニメ、BL漫画などメディアを通じた接触と、同級生の間に出回るうわさ、きょうだいから教わるなど仲間との共有体験がある。それらの情報は自分とは遠く離れた世界の情報であり、不確実な情報として受け止められる。小学校中学年から中学生の頃になると、周辺文化の情報を積極的に取り入れ始める。ネットで自分で調べたり、深夜帯のセクシュアルな番組を録画するなどである。このような情報は仲間づくりに役立てられ、知っている者にステータスが与えられている。このことから、特に情報そのものにはよい、悪いといった価値観は付与されていない。一方で、クラスなかで浮いている同級生の存在に気付くなど、遠く離れた情報がリアルなものとして感じられるのもこの頃である。なかには同性に対する恋愛感情を経験し、自分の体験として捉える者もいた。“LGBT”や“性的少数者”といった概念は、中学以降になると、自らの体験を重ね合わせたり、他の概念（例えば、障害）と結びつき、理解が深まっていく様相が見られた。アイデンティティを確立する中で、性的マイノリティ者としてのアイデンティティを实践するなどLGBTと親和性の高い者がいる一方で、侵襲的な経験によりLGBTに対して拒否的態度をとる者もいた。このことから、児童期から友人同士の間で性に関する情報を取り入れ始める子供たちへの適切な知識を付与すべきであること、性的マイノリティ者からのふいに侵入される経験へのサポートも必要であるといえる。青年期になると多様な性を認めようとする態度はみられるものの、性をめぐる二文法的世界の構築もみられ、セクシュアリティへの向き合い方は多層的であり、揺らいでいた。大人が性をめぐって子供や青年たちとコミュニケーションすること

の必要性が浮き彫りになった。

(4) 性をめぐるコミュニケーションには何が必要か

前項をふまえ、調査5の対話実践が実施された。多様な立場にいる者同士の対話フォーカスグループでは、セクシュアルマイノリティの当事者もそうでない者もお互いに対等な関係性のなかでよりよい社会に向けた展望を話し合うことが可能となった。重要なことは、対話の足掛かりとなる知識を共有していること(本調査の場合は、1冊の本や映像、当事者との対談)、お互いに解決策を持ち合わせていないこと、対話実践を支える枠(相手を否定しないルール、見守り役としての大人の存在)であった。議論では、それぞれが自らの経験や違和感を提出し、それを共有することで生きづらさの原点と原点同士のつながりを探り合い、それを解消する可能性のある未来に向けた語りがなされていた。この対話実践の振り返りのインタビューでは、参加者それぞれが深い学びを体験をしていることが語り直された。

(5) まとめ

本研究の目的は、小学校・中学校・高等学校における性同一性障害者/性別違和の児童・生徒(当事者)への支援の方法について、当事者-教員の間、当事者-保護者-教員の間、当事者-他生徒の間の3つのコミュニケーションの側面から検討を行い、現場で有用な支援モデルの構築を試みることであった。

研究期間全体を通じた成果として、第1に、当事者-教員の間、当事者-保護者-教員の間、当事者-他生徒の間の3つのコミュニケーションが成立するためには、学校や授業という枠組みが必要であることが明らかになった。そして「現時点で、正しい知識をお互いが同程度に持っている」ということよりも、二者、三者、クラス集団といった「共同体になっていくための未来に向けた語りやリソースを持っている」ということが重要であった。コミュニケーションの内容(何をコミュニケーションするか)そのものよりも、コミュニケーションの形式(いかにコミュニケーションするか)や場が重要だということである。

第2に、性別違和/性同一性障害の児童生徒の自己形成においては、実在の身近な人物の発言のみならず、様々な媒体(小説、メディア)における人物やキャラクターにまで及んだ。これらが意味するのは、コミュニケーションには複数の文化的シンボリックリソースの重要性である。さらに、シンボリックリソースは、当事者だけでなく、性の情報を取り入れていく他児童生徒、当事者の親にとっても自己形成やコミュニケーションの足掛かりとなる可能性がある。日本社会の性をめぐるシンボリックリソースはアニメやBL漫画のように限定的なものである。豊かな性的自己を形成し、大人と子供をつなぐコミュニケーションを検討するうえで、多様な価値をもった文化的リソースが多くあることが望ましいといえるだろう。

<引用文献>

郡 吉範(2022)教育実践研究会出版シリーズ9 LGBTQ+に配慮する学校教育の試み~公立中学校における実践~ 教育実践研究会.

文部科学省(2014)学校における性同一性障害に係る対応に関する状況について.

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2016/06/02/1322368_01.pdf

文科省(2016)性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について(教職員向け).

https://www.mext.go.jp/content/20210215_mxt_sigakugy_1420538_00003_18.pdf

中塚幹也・江見弥生(2004)思春期の性同一性障害事例の社会的,精神的,身体的問題点と医学的介入の可能性についての検討

Shojima Sachiko(2019)Development of the relationship between parents and their children who are sexual minorities: Negative emotions and perceptions after the children come out. 19th European Conference on Developmental Psychology.

Zittoun, T. (2007). The Role of Symbolic Resources in Human Lives. Jaan Valsiner, Alberto Rosa(Edit) Cambridge Handbook of Socio Cultural Psychology. Chapter16, 343-361. Cambridge University Press

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 原田 知佳・畑中 美穂・川野 健治・勝又 陽太郎・川島 大輔・荘島 幸子・白神 敬介・川本 静香	4. 巻 90
2. 論文標題 中学生の潜在的ハイリスク群に対する自殺予防プログラムの効果	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 351-359
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 篠木 絵里・荘島 幸子	4. 巻 第10号
2. 論文標題 パイオニアにきく（第10回）自分の力を取り戻す	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 質的心理学フォーラム	6. 最初と最後の頁 62-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 荘島 幸子	4. 巻 20
2. 論文標題 性に揺らぎをもつ子どもたちに寄り添う～いま、必要とされる学校での支援とは	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 69-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 荘島 幸子・鷹田 佳典	4. 巻 9
2. 論文標題 企画者から〈あいだ〉のダイナミズムを捉えるには	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 質的心理学フォーラム	6. 最初と最後の頁 93-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大倉 得史、莊島 幸子、鷹田 佳典	4. 巻 8
2. 論文標題 質的研究領域としての あいだ	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 質的心理学フォーラム	6. 最初と最後の頁 5-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 莊島 幸子
2. 発表標題 性的マイノリティのパーソナリティ発達
3. 学会等名 日本青年心理学会、日本パーソナリティ心理学会共催
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 莊島 幸子
2. 発表標題 ある性別を引き受けるということ 「なじむ」「追いつく」「重ねる」という語りにみる性的自己の定位と揺らぎ
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 莊島 幸子
2. 発表標題 セクシュアリティをめぐる概念形成に関する発達のプロセス
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Shojima Sachiko
2. 発表標題 Development of the relationship between parents and their children who are sexual minorities: Negative emotions and perceptions after the children come out.
3. 学会等名 19th European Conference on Developmental Psychology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shojima Sachiko
2. 発表標題 Developmental Process of Assimilating Information on Sexuality and Forming Friendly Attitudes: Based on Interviews with University Students
3. 学会等名 32nd International Congress of Psychology
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 荘島 幸子
2. 発表標題 性的マイノリティの自殺予防：発達に伴うリスクからみた、支援のポイント
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 荘島 幸子
2. 発表標題 「アイデンティティ」の魅力を再考する(その4) ~セクシャルマイノリティという経験とその支援~
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 荘島 幸子
2. 発表標題 性的少数者の自殺予防
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川野 健治、荘島 幸子
2. 発表標題 小学生の援助希求について
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 荘島 幸子
2. 発表標題 性別移行とレジリエンス
3. 学会等名 日本質的心理学会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 荘島 幸子
2. 発表標題 文化化される身体、身体化される文化
3. 学会等名 日本質的心理学会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 荘島 幸子
2. 発表標題 ジェンダーワークとしてのよそおい - 自己のトータルコーディネートと再編集 -
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 荘島 幸子
2. 発表標題 中学校教員の「多様な性」に対する意識 多様な性を生きる子どもへの対応や性に関する学校教育に対する意識の違いから
3. 学会等名 日本質的心理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 荘島 幸子
2. 発表標題 安心感を生起させる雰囲気とは何か
3. 学会等名 日本質的心理学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 (監訳)二宮 克美、子安 増生(編集)河合 優年、服部 環、郷式 徹、山 祐嗣、小塩 真司、仲真紀子、根ヶ山 光一、氏家 達夫(分担執筆)尾崎 幸謙、荘島 幸子他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 6000
3. 書名 児童心理学・発達科学ハンドブック	

1. 著者名 (編集者)川野 健治・勝又 陽太郎(分担執筆) 荘島 幸子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 136
3. 書名 学校における自殺予防教育プログラム GRIP グリップ 5時間の授業で支えあえるクラスをめざす	

1. 著者名 (編集)川島 大輔・近藤 恵(分担執筆・共著) 荘島 幸子・川島 大輔	4. 発行年 2016年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 294
3. 書名 はじめての死生心理学(第12章第一著者)	

1. 著者名 (編集)荒川 歩・鈴木 公啓・木戸 彩恵(分担執筆) 荘島 幸子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 300
3. 書名 よそおい行為の心理学(分担執筆)	

1. 著者名 荘島 幸子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 実業之日本社	5. 総ページ数 300
3. 書名 キャリア教育の射程	

1. 著者名 (監訳) 竹島 正(分担執筆) 荘島 幸子・川野 健治	4. 発行年 2023年
2. 出版社 中央法規出版	5. 総ページ数 300
3. 書名 地域共生社会のための精神医学	

1. 著者名 (編集) 吉田 文・渡邊 浩一・濱中 淳子(分担執筆) 荘島 幸子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 300
3. 書名 専門書を読もう	

〔産業財産権〕

〔その他〕

researchmap https://researchmap.jp/s.shojima 帝京平成大学教員紹介 https://unipa.thu.ac.jp/kgResult/japanese/researchersHtml/20130034/20130034_Researcher.html

6. 研究組織		
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)
		備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------